幕末の動乱期、国の病を治す道を選んだ勤皇の志士　多事多難な人生

▶権田直助肖像画（町指定文化財）慶応２年（１８６６）、倒幕運動のため江戸薩摩藩邸に入った直助が毛呂郷平山村の斎藤実平（初代毛呂村長・平山左二馬）に送った肖像画といわれている。

医者・国学者・勤皇の志士・神道家・国語学者

権田直助

毛呂本郷に生まれ、大山阿夫利神社（神奈川県伊勢原市）に銅像が建てられている権田直助。その人生は波乱に満ち、医者、国学者、勤皇の志士、神道家、さらに歌人、書家そして国語学者といった様ざまな顔をもっていました。数々の業績を残した直助ですが、その内容はあまり知られていません。今回は直助の生涯をたどり、その足跡に迫ります。

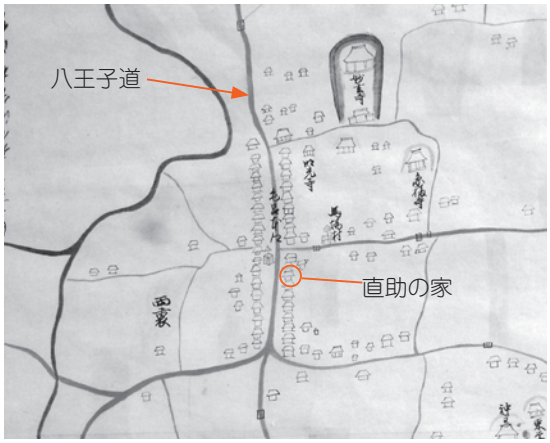
権田直助年譜（年齢は数え年）		世の動き
文化6年（1809）1歳	1月13日、入間郡毛呂本郷に漢方医の父・嘉七、母・久良子の長男として生まれる。	
文政8年（1825）17歳	父・嘉七の病死。	◆外国船打払令
文政10年（1827）19歳	妻・菊子を娶り、母への孝養と家事を託し、漢方医学を学ぶため江戸へ出る。	
天保元年（1830）22歳	医道修業のため各地を遊歴。	

江戸時代末期、八王子道が通り、市が開かれるなど、賑わいを見せていた毛呂本郷。この地に、権田直助は文化6年（1809）1月13日生を受けました。権田家は代々医者を生業とし、直助の祖父・又左衛門、父・嘉七とも技量が高く、人びとから信頼された医者で、経済的にも裕福な家であったようです。

少年期の直助は、向学心にあふれ、父より医書を学び、漢籍を同郷の先輩である下田素耕から学んで知識を得ていたようです。高い才能を持ち、覚えはよかったと伝わっています。

この時代は、ロシアをはじめ諸外国船が日本に来航し、通商を求めてきており、幕府は対応に苦慮していました。時代は、幕末の動乱期に向かい、経済状況の悪化から、人びとは厳しい生活を強いられていました。そうしたなか、直助は医業の道に進むべく、学業に精進しますが、17歳の時、父親が病死してしまい、家業を継ぐまでの技量はないと悟り、最良の師を求めて江戸に出ています。

直助は漢方医として一家をなしますが、その向上心から、いろいろな道に進んでいます。日本古来の医道の復興に心血を注いだ医者として、尊王思想から倒幕運動に命をかけた勤皇の志士として、さらに国学者、神道家、国語学者と多岐にわたっています。また歌人、書家としての才能も発揮しています。



▲毛呂郷大絵図の一部（天保４年）○印が直助の家

▲現在の毛呂本郷（毛呂本郷交差点北側）

▶生地には埼玉県指定旧跡『権田直助生地』の標柱が建つ（岡部米店前）

天保4年（1833）	25歳	故郷に戻り、実家の門前に表札を掲げ一家をなす。	◆天保の大飢饉
天保8年（1837）	29歳	国学四大人の一人、平田篤胤に入門。古医道を究めるため、古典研究の必要性から国学の道に入る。	
天保12年（1841）	33歳	平田篤胤の思想が幕府批判ととられ、江戸を離れたため、直助もやむなく帰郷する。	
嘉永元年（1848）	40歳	日本古来の医道である皇朝医道を研究し、日本最古の薬方書「神遺方」を詳しく説明した「神遺方経験抄」を草稿。	
嘉永6年（1853）			◆ペリー浦賀に来航
安政5年ごろ（1858）			◆蘭方医安藤文澤、多数の幼児に種痘を実施
文久2年（1862）	54歳	医業を門人に委ね、上洛し上流社会の人びとに国学を論じるなど、尊王攘夷運動に傾倒する。	
慶応3年（1867）	59歳	糾合所屯集隊・大監察として苅田積穂の名で薩摩藩邸に入り、薩摩藩邸焼討事件に関わる。	◆大政奉還 ◆坂本龍馬暗殺 ◆王政復古の大号令
明治元年（1868）			◆鳥羽伏見の戦い
明治2年（1869）	61歳	刑法官監察知事に任命される。新政府による大学校設立の際には中博士に任命され、皇朝医道の専任教授を務める。	
明治4年（1871）	63歳	確たる理由もなく国事犯の嫌疑を受け、金沢藩に幽閉される。	
明治5年（1872）	64歳	政治一切を断念し、国学の研究に従事する。	◆太陰暦から太陽暦へ
明治6年（1873）	65歳	大山阿夫利神社の祠官に招かれ、後に三嶋大社の宮司を兼務。	
明治14年（1881）	73歳	本籍を大山（現在の伊勢原市）に移す。	
明治15年（1882）	74歳	皇典講究所の教授に就く。	
明治16年（1883）	75歳	教導職の最高位である大教正となる。	
明治20年（1887）	79歳	6月8日、風邪をこじらせ没す。没後「国文句読考」が出版される。	

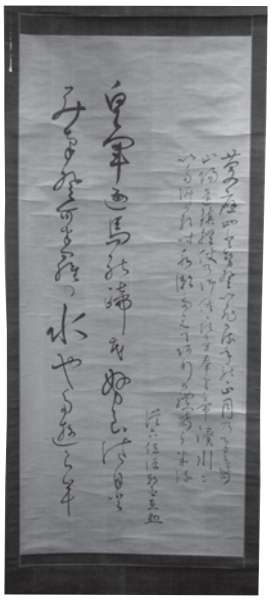
『医者・権田直助』日本古来の医道に没頭

文政8年（1825）、直助17歳のとき、父親が他界。最良の師を求め、19歳で江戸遊学に旅立っています。

江戸では、漢方医学の第一人者で将軍の侍医であった野間広春院に弟子入りし、ひたすら研究と勉学に励みました。3年間で医書も漢籍も学び終えた直助は、さらに3年間各地を遊歴し、25歳で念願の家業を継ぐことができたのでした。その治療は、評判を呼び、患者も多く集まり、経済的にも豊かになっていきました。

弟子もできた直助ですが、漢方医学だけでは飽き足らず、その情熱は日本古来の医道へと目が向けられます。漢方や西洋の処方に頼るのではなく、日本には神が遺した『神遺方』という日本最古の薬方書が伝えられており、これらの医道を再興し治療に用いれば多くの人が救われると考えたのです。直助は、日本古来の医学である古医道を究明するには、古典研究が重要と考え、国学四大人の一人、平田篤胤に入門。29歳のときでした。篤胤のもと3年の間、皇朝医道の研究に情熱を燃やしました。直助は、病人を単に肉体的な人間として見るのではなく、精神的な部分も重要であると説いたのです。

天保12年（1841）、33歳で故郷に戻り、医業に従事し、古医道を実践。漢方医を廃して、「皇朝医家」の看板を掲げ、古医道による医療を始めました。しかし評判は上がらず、生活は困窮。それでも直助は、昼夜を問わず研究に没頭し、その結果、学説としての『神遺方』をより実践的なものにした『神遺方経験抄』を書き上げたのです。直助40歳のときでした。その後、多くの古医道に関わる書物を残し、その功績は江戸市中まで知れわたったとされています。



◀念願の尊王倒幕運動がかない、直助が得意の絶頂にあったころの作品（慶応4年1月）（個人蔵）

慶応四年とせといひける年の正月のなかば山陽道鎮撫使の御供につかへ奉りて湊川にいたりける時水瀬たえてありければよめる

従六位源朝臣直助

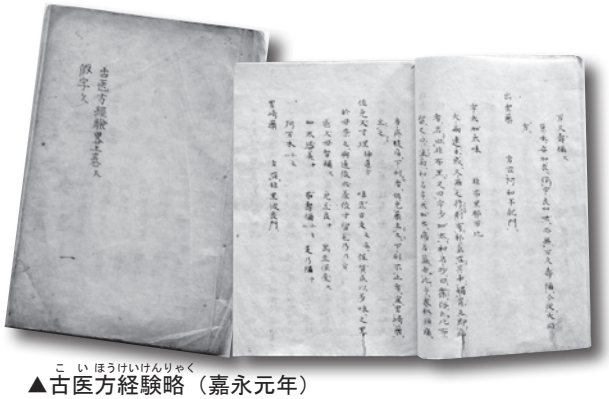
皇軍の馬の蹄もぬらさじと
みなとかはらの水やたゆらむ

『国学者・権田直助』尊王攘夷・倒幕運動に傾倒

文久2（1862）年、直助54歳のとき、母親が他界、身内への心配がなくなったことから、妻と共に上洛。世は攘夷論に沸いているときで、直助も時代の波にのまれていきます。

古医道を研究する直助には、平田篤胤の思想が影響しています。篤胤は『古事記伝』を著した本居宣長の流れをくみ、仏教や儒教がもたらされる以前の神とつながる精神に立ち返ろうという復古神道を唱えた人です。こうした日本古来の精神文化の優位性を説く思想が、尊王攘夷・倒幕運動へとつながっていきます。

『人の病は国の病より小さい。吾は先ず大いなるものを治療しなければならない』と直助が語ったと伝えられていますが、国の情勢を憂い、医業を投げ打ってでも国家を変えようとする決意が感じられます。このころの直助は公家などの上流社会の人びとと盛んに交流し、国学を論じ、憂国の真心を説くなど、その活動は目覚しいものがあったようです。国家を変えようとする決意は門人たちも同様でした。倒幕に対する強い意志表示とされる足利三代木像梟首事件（足利将軍3代の木像の首を京都賀茂川にさらした事件）では、直助の門人数名が加わったとされています。この件で要注意人物となった直助ですが、相楽総三の糾合所屯集隊に大監察苅田積穂の名で、関東における実情偵察や後の倒幕運動に大きな影響を与えた薩摩藩邸焼討事件に関わっています。まさに倒幕運動の一端を担ったといえます。その後、鳥羽伏見の戦い、戊辰戦争と続いていきます。



▲古医方経験略（嘉永元年）
「神遺方経験抄」と同時期に作成したもので、古医道を実地経験し、そのあらましを記述している（個人蔵）

『神道家・権田直助』神社再興の先駆者として尽力

明治維新では、王政復古が実現され、国学者の主義主張が貫徹されました。直助は国学を中心とした教化運動のなかで、指導者として刑法官監察知事、大学校で皇朝医道の専任教授を任されています。しかし、維新当初に政治を動かした国学中心主義も、急激に広まった西洋文化と相容れず、国学者は徐々に社会や政府から排除されることになります。

直助も、明治4年（1871）、63歳で確たる理由もなく国事犯の嫌疑を受け、金沢藩に幽閉されてしまいます。これを契機に、政治一切を断念して、国学の研究に従事。この時点で、古医道の研究はひとまず休止しています。

▲大山阿夫利神社に建つ直助の銅像（神奈川県伊勢原市）

明治6年（1873）、直助は神道家の道に進みます。大山阿夫利神社（神奈川県伊勢原市）の祠官に招かれ、後に三嶋大社（静岡県三島市）の宮司を兼務しています。明治元年（1868）に行われた神仏分離運動の指導がきっかけとなり、両神社の長を任されています。国家のために尽力してきた直助にとって晩年の仕事として選択したことは、苦渋の決断であったものと思われますが、国学がもはや時代に相容れないと悟ったからだといわれています。しかし、直助の向上心は尽きることなく、神社再興の先駆者となっていくのです。その功績として3つの事業が挙げられます。1つは、信徒の組織化を行い、信仰が深くなるよう布教活動の教化を行いました。2つ目は、祭式の作法を根本的に統一、それは神仏分離後、神道界の基準となるものでした。3つ目は社会教化の一環として、和歌を選んで音譜を定め、完全な謡い物を作って、神祭葬儀のときなどに謡ったことです。

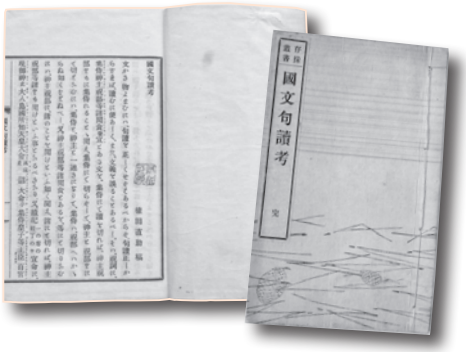
▲三嶋大社拝殿（静岡県三島市）

かくして、直助は苦慮の末、大山を永住の地と定め、明治14年（1881）に本籍を移しています。その6年後、明治20年に79歳でこの世を去りました。

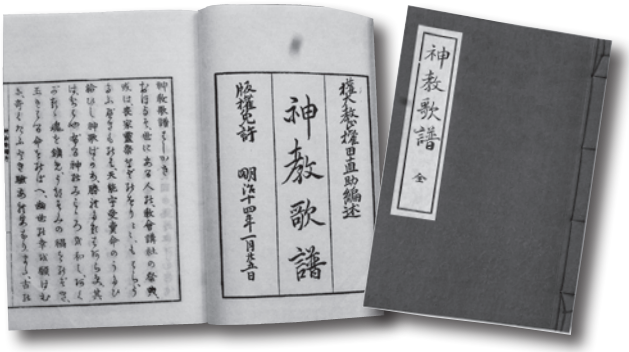
『国語表記の始祖・権田直助』

多方面に活躍した直助ですが、国語学、国文法の分野でも大きな業績を残しています。明治20年（1887）に亡くなりますが、同年、没後に『国文句読考』が出版されています。直助は、句読点がない文章は正しく読むことができず、意味も正確に伝わらないとして、文章の構造と句読点の関係、句読点の必要性を説きました。

この『国文句読考』は、日本で初めて出版された句読点に関する学術書とされています。現代では、当たり前のように用いられている「、」や「。」ですが、明治39年（1906）に文部省は『句読法（案）』、戦後の昭和21年（1946）には『くぎり符号の使い方（句読法）（案）』を作成しています。しかし、強制力はなく、現在でもまだ十分に決められてはいません。直助がいかに早くから、国文法、文章表現の大切さを考えていたかがわかります。



▲国文句読考（明治20年出版）（個人蔵）



▲神教歌譜（復刻本）、神祭葬儀に使う歌謡で、音節、譜を直助がつけたもの

権田直助没後125年記念企画展

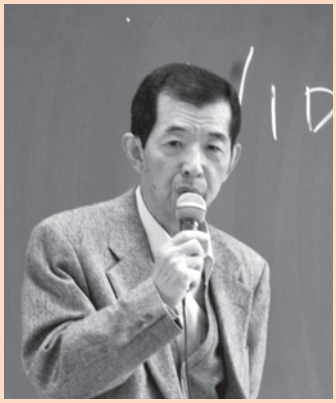
10月14日～11月16日、企画展『郷土に残る国学者権田直助の足跡』を歴史民俗資料館で開催

◀歴史民俗資料館で開催された権田直助の企画展

▶郷土の偉人・権田直助を知るための授業で企画展に訪れた埼玉医科大学の学生

激動の幕末を駆け抜けた郷土の偉人、まさに至誠の人

権田直助研究の第一人者
内野勝裕さん



郷土歴史講座で「権田直助の残した足跡」について解説する内野勝裕さん（毛呂山町文化財保護審議委員会委員長）

◆企画展の趣旨

これまで、権田直助については、あまり注目されていませんでした。本来であれば、生誕200年を記念して3年前に企画したかったのですが、難解な部分も多く、整理に時間を要してしまいました。しかし、郷土の偉人として、多くの人に注目してほしくて、今回の企画展となりました。

◆直助の最大の功績とは

功績が多くて、簡単には答えられませんが、尊王攘夷・倒幕運動に参加し、倒幕の一端を担っていたのは間違いありません。幕末の動乱期に国の病を治すがごとく奔走した姿は、時代の流れだとしても、信念を貫き、勇気ある行動であったと思います。まさに至誠の人であったのではないでしょうか。

私が、特に注目したいのは、倒幕運動の際、直助が岩倉具視の密議に加わり内命を受けていたことです。明治維新の王政復古という精神は国学を中心とする政治思想であり、岩倉具視も直助らの影響を受けたのだと思います。

◆直助が残したもの

直助が記した文献は数多く、医学書、幕末の行動日記、国文法に関する書物など多岐にわたっています。そのなかでも、時世の歌を書に残しています。その功績とともに、直助の書を町内でも多くの人が所有しています。そうした作品を見ても、書に長け、歌人としての才能を感じるものです。

多くの功績を残し、称えられるべき偉人であると思います。できれば、どなたか歴史小説として取り上げてくれることを願っています。それだけの要素は十分にあると思います。

句読点の表記と神教歌の普及は注目すべき功績です

いせはら歴史解説アドバイザー
齊藤勢吾さん
ISEHARA・おもてなし隊代表で、大山信仰や権田直助の調査研究に携わっている。

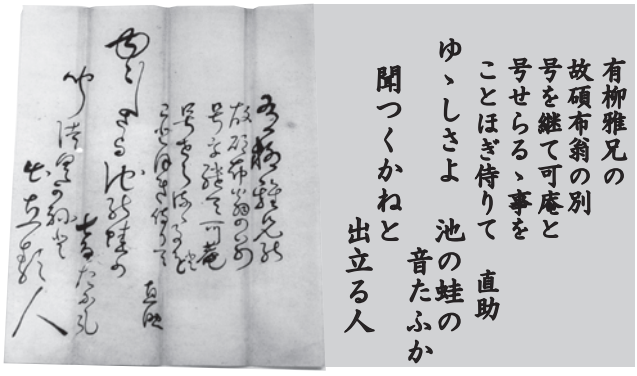
◆伊勢原での権田直助

大山阿夫利神社がある伊勢原市では、直助はあまり多く語り継がれていません。それは一時期の過激な行動が要因であると考えられますが、その功績は徐々に注目を集めています。明治維新における貢献は大きな功績だと思いますが、国語学者として句読点の必要性を説いた点と神教歌を普及した点は注目すべき功績だと思います。

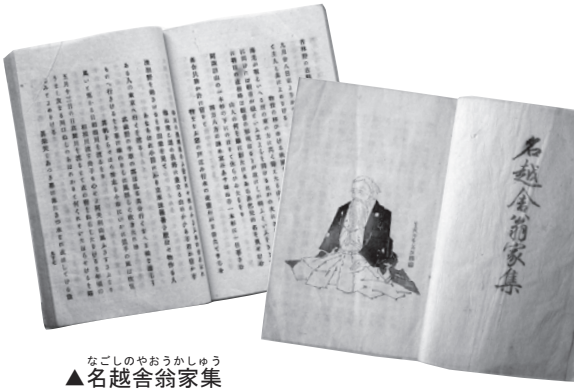
◆直助の功績を広めたい

直助没後に出版された句読点に関する書物は、勤皇の志士とは無関係の国文学者としての著述ですが、世間的にはあまり評価されていません。句読点学の第一人者・大類雅敏氏に「句読点のバイブル」とまでいわれたほどの重要な文献なのです。神教歌も、直助が世に広めたものです。私は、こうした偉業を世に広めたいと考えています。さらに、直助の魅力に迫れたらと考えています。

郷土に残る直助遺産

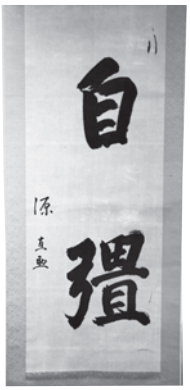


◀川角村出身の俳人・野口有柳が師匠の川村碩布の号別可庵を継いだことを祝って直助が贈った歌

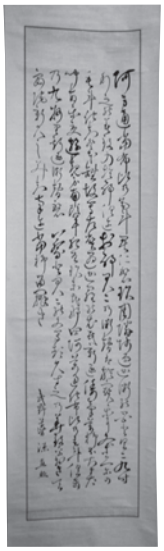


▲名越舎翁家集
門人により、直助の代表的な歌を編集した歌集（個人蔵）

▲出雲伊波比神社社号碑（明治10年建立）文字は直助の書によるもの



▲直助自筆の書（個人蔵）



◀直助が医者として生きる自負や決意を歌ったもの。落款（署名）に「武野草医」（武蔵野の田舎医者）とある（個人蔵）

●いまも続く大山詣

大山阿夫利神社への信仰として、参詣するために組織された大山講は、江戸時代には存在していたと思われますが、現在も大山詣を行っている人たちがいます。その一人、大山節分会の福田忠次さん（大師一区）は「大山講の始まりは農民信仰からだと思いますが、今も続いていることを考えれば直助を偲んでの参拝の意味のほうが強くなっているのではないでしょうか」と語り、毎年、宿坊に泊まるのが楽しみだといいます。

●直助が後世に残したもの

人々のために、医者として病を治すことに専念し、やがて国家の病を治すまでに発展した直助の行動は、地域や自国をこよなく愛していたからだと思います。晩年、毛呂本郷を去ることになりますが、郷土への愛着は次の歌からもわかります。

「四方八方の詠め宜みあすはねの一本杉に一日暮さむ」

これは、直助の歌を門人たちが編集した『名越舎翁家集』に出ている一首です。阿諏訪の一本杉峠に登り、一休みして詠んだ歌と記されています。こうした歌や書は、掛け軸などに残され、今に伝えられています。

多くの足跡を残している直助。その原点は、人びとへの愛であり、誰かを助けたいという信念が道を切り開いてきたように思います。

▲毎年、節分の日に合せ、大山阿夫利神社に参拝をする大山節分会の皆さん

資料提供（毛呂山町歴史民俗資料館）
P2 権田直助肖像画／P3 毛呂郷大絵図／P4 掛軸「皇軍の馬の蹄…」／P5 神教歌譜（復刻本）／P7 有柳の可庵嗣号を祝す歌

参考文献
毛呂山町史／新毛呂山町史／毛呂山町資料集【第５集】草奔の志士『権田直助』／権田直助先生伝／郷土歴史講座「郷土に残る国学者権田直助の足跡」